＜研究ノート＞

# マルタにおけるパウロの奇跡物語
## ――マルタ人歴史学者マリオ・ブハジャーの研究から――

上村　静*

## 序

使徒行伝 27 章 1 節－28 章 10 節には、海路ローマへと向かうパウロを乗せた船が難破してマルタ島に漂着し、そこに 3 か月滞在したことが述べられている。マルタ島は面積約 246 $km^2$ であり、仙台市青葉区(約 302 $km^2$)より小さい。1974 年にイギリスから独立したマルタ共和国は、マルタ島にゴゾ島(約 67 $km^2$)とコミノ島(約 3.5 $km^2$)を加えた 3 島を居住地とし(3 島の総面積は約 316.5 $km^2$)、2022 年 12 月現在の人口は約 51 万人である[1]。マルタ共和国はローマ・カトリックを国教に定めており、キリスト教がマルタ人のナショナル・アイデンティティ形成に大きな役割を果たしている。2018 年 4 月 2 日の Malta Today(マルタの新聞)の記事によると、93.9%のマルタ人が自分をカトリック教徒と認識し、アンケート回答者の 2/3 が前週の日曜礼拝に参加したという[2]。マルタ人のカトリック・アイデンティティは、パウロのマルタ島滞在に関する新約聖書の記事に由来しており、パウロの漂着以来、連綿とキリスト教信仰が受け継がれてきたということがナショナル・ヒストリーになっている。

こうした国史に対して、マルタ人歴史学者マリオ・ブハジャー（Mario

* 尚絅学院大学教授

[1] マルタ観光局（https://www.mtajapan.com/travelinformaionmain）2022 年 12 月 28 日閲覧。

[2] Malta Today（https://www.maltatoday.com.mt/news/data_and_surveys/85738/maltatoday_survey__maltese_identity_still_very_much_rooted_in_catholicism）2022 年 12 月 28 日閲覧。

Buhagiar）――1945 年生まれ、マルタ大学教授、マルタ歴史学会会長等を歴任した後、2022 年現在マルタ大学客員教授――は、マルタがキリスト教化したのは 16 世紀に入ってからであることを主張する稀有なマルタ人研究者である。日本の新約聖書学界においてはマルタ島に関する研究はほぼ皆無であること、特にマルタ人学者の研究を目にする機会がほぼないことから、本稿ではパウロの難破とマルタ島滞在に関するブハジャーの研究をとおしてどういう論点があるのかを紹介しつつ、マルタにおける奇跡物語について、だれがいかなる目的で生み出したものであるかについて仮説を提示する[3]。そしてブハジャーの研究姿勢から、自国の歴史を批判的に見直すことが多文化共生に寄与する可能性について考察したい。

## 1. 難破論争[4]

### 1.1 旅程

使徒行伝の記す旅程の前半について地理上の問題はあまりない（図 1 参照）。エルサレム、カイサリア、シドン、小アジア（現トルコ）のリュキア州のミラ[5]、クニドス港、そしてクレタ島のサルモネ岬を回ってラサ

---

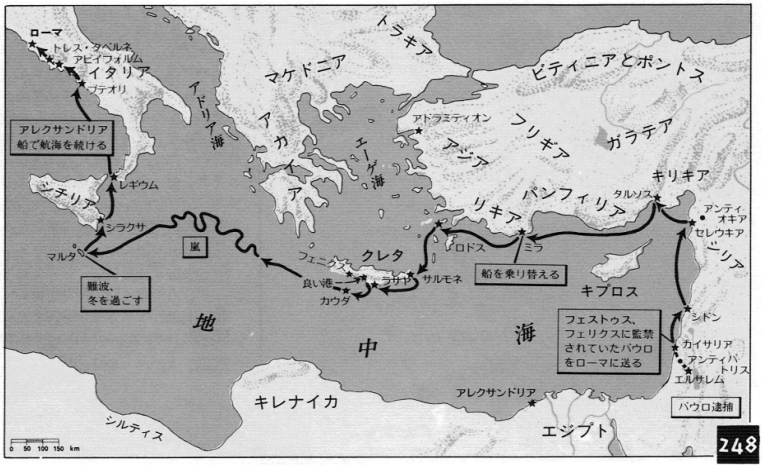
[3] 本稿ではブハジャーの以下の論文を紹介する。"The St Paul Shipwreck Controversy: An Assessment of the Source Material," in idem, *Essays on the Archaeology and Ancient History of the Maltese Islands: Bronze Age to Byzantine,* Santa Venera: Midsea Books, 2014, 59-84. 同書は論文集であり、当該論文の初出は 1993 年にロンドン大学に提出されたブハジャーの博士論文の第 1 章である。博士論文に手を加えたものが 2007 年に以下のタイトルで発行されている。*The Christianization of Malta: Catacombs, cult centres and churches in Malta to 1530,* BAR International Series 1674, Oxford: Archaeopress in conjunction with BAR/Hadrian Books (reprinted by BAR Publishing, 2017). その第 1 章のタイトルは、"The Shipwreck Controversy – Pauline Legends And Traditions"となっており 2014 年版と異なっているが、内容はほぼ同じである（若干の改訂がなされてはいる）。本稿では最新の 2014 年版に基づく（以下ではブハジャー2014 と記す）。なお、本稿では日本人読者のためにブハジャーの議論を必要に応じて補足する。

[4] ブハジャー2014: 59-62 頁。

[5] ミラの異読にリュストラがある。ミラは知られているが、リュストラという港はここ以外では知られていない。ブハジャーはリュストラの読みを採用し、注 11（p. 79）にミラはよく知られているが、リュストラという港はここ以外では知ら

ヤ近くの「良い港」に到着する。その後、クレタ島のフォイニクス（Φοῖνιξ）で越冬しようと船を動かすが嵐によって船が流され、カウダ（ないしクラウダ）という小島（クレタ島の南約 100 km）の陰を通り、スュルティス湾（現リビア北岸〜チュニジア東岸の湾）に入り込まないようにしつつ流れに任せ、14 日間アドリアの海（Ἀδρίας）を漂流した後にメリテ（Μελίτη）に漂着したという。そしてそこに 3 ケ月滞在した後、シチリア島のシュラクサを経由してローマに到着した（使 27:1-28:14）。メリテをマルタと同定することへの反論は、主に（1）暴風の方向、（2）スュルティス湾の位置、（3）アドリアスの海が今日のアドリア海と同じという想定の 3 点である[6]。

図 1：パウロのローマへの旅程（マルタ経由版）[7]




---

れていないと記す。ただし、リュストラはリカオニア州の町（海からは遠い内陸に位置）として使 14:6, 8, 21; 16:1, 2 に言及されている。

[6] A. Ackworth, “Where Was St. Paul Shipwrecked? A Re-Examination of the Evidence,” *The Journal of Theological Studies* 24 (1973) 190-193.これに対する反論として、C. J. Hemer, “Euraquilo and Melita,” *The Journal of Theological Studies 26* (1975) 100-111 がある。

[7] Y・アハロニ、M・アヴィ＝ヨナ『マクミラン聖書歴史地図』池田裕訳、原書房、1988 年、155 頁、248 番。

## 1.2　暴風の方向

「良い港」を出立するとパウロの乗った船が暴風に遭うのだが、この風には写本により εὐροκλύδων（Εὖρος 東南東風＋κλύδων 荒波＝東南東風の荒波）と εὐρακύλων（Εὖρος 東南東風＋*aquilo* 北北東風＝北東風）の二つの読みがある（使 27:14）[8]。*euroaquilo* という合成語は、チュニジアのトゥッガ／ドゥガ（Thugga/Dougga）遺跡の舗道にあるラテン語の 12 風配図で北から東に 30 度の北北東の位置を指しているので[9]、写字生の間違いということはない。この暴風が沖に向かって（つまり北東風）であり、またスュルティスがキュレナイカ（現リビア）沖の湾を指しているのであれば、メリテがマルタであることについて疑いの余地はなくなる。しかし、κατ᾽ αὐτῆς（代名詞は「クレタ島」を受けている）の前置詞 κατάを「島から下へ」（北東風）と取るか、「島に向かって」（南東風）と解するかによって、風向きにはまだ議論の余地がある。

## 1.3　スュルティス湾

スュルティス（Σύρτις: 使 27:17）は「砂洲」を意味する普通名詞ではなく、アフリカの北岸沖にある大スュルティス湾（キュレナイカからミスラタ辺りまで）、または小スュルティス湾（トリポリ辺りから西側）を指す。浅瀬が所々にあり、また海流が複雑であったため、船乗りの間で悪名高い海域であったとされる[10]。この同定の問題は、カウダ（クラウ

---

[8] 他にも幾つかの異読がある。Εὐρακύλων $\mathfrak{P}^{74}$ ℵ A B*(it$^{ar, c, dem, gig, p(*), ph, ro, s, w}$ vg Cassiodorus: *Euroaquilo*) syr$^{pal}$ cop$^{sa, bo}$//Εὐροκλύδων（B$^{2}$ 181 Εὐρυκλύδων）Ψ (33 Εὐροκοίδον 36 (81 Εὐροκλύδω) 307 453 610 614 945 1175 1409 1678 1739 1891 2344$^{vid}$ 2464 *Byz* [L P$^{c}$] *Lect*（ℓ 1356 Εὐρουκλύδων）syr$^{p, h, h}$*mg*, (h*gr*) slav$^{mss}$ Chrysostom// *omit*　ὁ καλούμενος Εὐρακύλων P*（UBS5 Apparatus）。

[9] *CIL* VIII 26652. Epigraphik-DatabankClauss/Slaby で写真を見ることができる。（https://db.edcs.eu/epigr/bilder.php?s_language=en&bild=$CIL_08_26652_1.jpg;$CIL_08_26652_2.jpg;$CIL_08_26652_3.jpg;$CIL_08_26652_4.jpg;$CIL_08_26652_5.jpg;$CIL_08_26652_6.jpg;$CIL_08_26652_7.jpg;$CIL_08_26652_8.jpg;$CIL_08_26652_9.jpg;$CIL_08_26652_10.jpg;$CIL_08_26652_11.jpg;$CIL_08_26652_12.jpg）

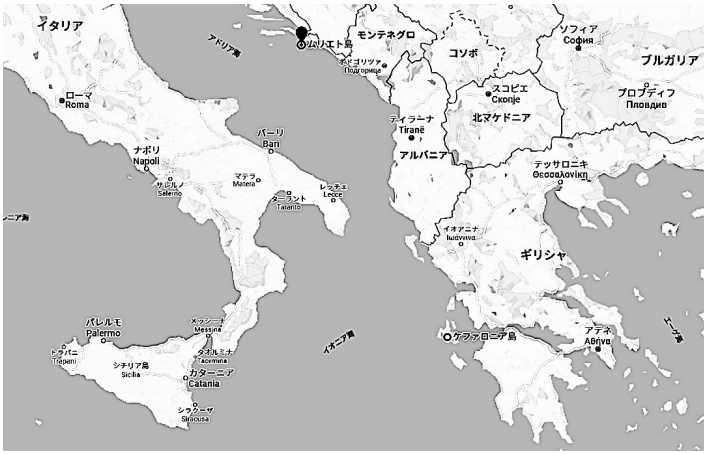
[10] スュルティス湾については、田川建三訳著『新約聖書 訳と註２下 使徒行伝』作品社、2011 年、645-646 頁、荒井献『使徒行伝下巻』新教出版社、2016 年、

ダ）の直後に言及されているので、北東の暴風にさらされている船が約640km 離れたスュルティス湾の砂洲まで導かれることを怖れているという事態に無理があるように見えることにある（図２参照）。

図２：スュルティス湾（Google Maps）

## 1.4　アドリアスとアドリア海

図３：メレダ（ムリエト島）とケファロニア島 (Google Maps)




344 頁参照。

古代文献においてアドリアス（Ἀδρίας: 使 27:27）がどこの海を指すのかは曖昧である。ヘロドトスとストラボンは今日のアドリア海の意味で用いているが、プトレマイオスは今日のアドリア海を ὁ Ἀδριατικὸς κόλπος とし[11]、地中海の真ん中をἈδρίας と表記して区別している[12]。ルカがアドリアスを今日のアドリア海の意で用いているなら、メリテはダルマティアの島メレダ（現クロアチアのムリエト島）を指していることになる。マルタ説の最大の根拠は、メリテを出発したパウロ一行が次にシチリア島のシュラクサに行ったことにある。メレダであったなら、ブルンドゥシウム港かアドリア海に面した港に行ったと推測されるからである。けれども、問いはまだ開かれている（図 3 参照）。

## 2. マルタ―メレダ論争[13]

マルタにおけるパウロ崇拝は、1299 年にカテドラルがパウロに奉献される前には確認されない。10 世紀の皇帝コンスタンティヌス 7 世ポルフュロゲネトス（在位 945-959 年）は、メレダを難破の場所としている[14]。これはビザンツ帝国の伝承を反映している可能性がある。これに対してローマの伝承はマルタを好んでおり、ローマの副助祭アラトリスの使徒行伝の敷衍（544 年頃）で言及されている[15]。メリテをマルタと同定する「確かな考古学的証拠」とされるローマ時代の別荘地サン・パウル・ミルキ（San Pawl Milqi）の初期パウロ伝承は、ローマ大学の発掘隊によって 1960 年代に発掘されたものであるが、様々な要素が絡み合って複雑であり、その証言は決定的ではないし真意のはっきりしない質のものである。現時点では中世後期より前にマルタにパウロ伝承があったとする根拠はない。

1730 年にメレダのベネディクト修道院長イグナチオ・ゲオルギによってメリテをメレダと同定する見解が出された。その議論は学問的に裏打ちされたものであったが、パウロを民族アイデンティティー涵養の担保

---

[11] τὸ Ἀδριατικὸν πέλαγος と記すこともある。

[12] ヨセフス『自伝』15 もἈδρίας を広い意味で用いている。荒井『下巻』353。

[13] ブハジャー2014: 63-65 頁。

[14] *De Administrando Impero,* Corpus Scriptoricorum Byzantinorum, xxxvi, Bonn 1840, 163.

[15] Aratoris, *De Act. Apost.* ii, 1121-1127.

にしたい聖ヨハネ騎士団の支援によってマルタ人研究者が一斉に反発し、ベネディクト会士による学問的評価にもかかわらずゲオルギは悪名を負うことになってしまう。しかし、19 世紀にはイギリスのオックスフォード大とケンブリッジ大で、20 世紀にはカトリック陣営内部において学問的議論は続けられ、今なお決着がついたとは言えない状態にある。

### 3. ケファロニア説[16]

1987 年にハインツ・ヴァルネッケは、マルタ説、メレダ説の両方を退け、ギリシアのケファロニア島（図 3 参照）のアルゴストリ岬を行伝のメリテと同定した[17]。彼はこの論文でブレーメン大学から博士号を授かるとともに学界外からの称賛を浴びたが、神学および聖書学の学界では批判にさらされた。彼の議論は、パウロ一行が「良い港」を出立して越冬しようとしたフォイニクス（Φοῖνιξ）が一般に想定されているようにクレタ島の南岸であったなら、その二つの港は近いのでパウロと船員たちの間でもめること（使 27:9-12）はなかったはずだという考えにもとづいている。そこで彼はフォイニクスをペロポネソス半島の南西にあり、後 2 世紀のパウサニアスによってフォイニクース(Φοινικοῦς)と呼ばれている港と同定する[18]。自説を実証するためにヴァルネッケは行伝テキストの λιμένα τῆς Κρήτης を普通の「クレタの港」ではなく、「クレタへの／からの港」と訳し、この属格は通常の部分を示す用法であると主張する。より恣意的なのは、行伝の Φοῖνιξ を Φοινικοῦς に改変し、また 1 世紀にクレタにフォイニクスと呼ばれた港が存在していた事実を否定している。その港の存在は、1950 年の考古学的探究では否定的結果しかなかったにせよ、ストラボンとプトレマイオスによって証言されている[19]。他にも無理な議論を押し通しているので、この説を真剣に取り上げる価値はない。真摯な論点はマルタとメレダの間にある。

---

[16] ブハジャー2014: 65-67 頁。

[17] Heinz Warnecke, *Die Tatsächliche Romfahrt des Apostels Paulus,* Stuttgarter Bibelstudien 127, Stuttgart: Verlag Katholisches Bibelwerk 1987.

[18] パウサニアス『ギリシア案内記』IV, 34, 12。

[19] ストラボン『地誌』X, 4.3、プトレマイオス『地理学』III, 17.3。

## 4.　毒ヘビ問題[20]

### 4.1　メリテのパウロ

旅と難破の記述に比べると、パウロのメリテ滞在についてはかなり短い（使 28:1-10）。遭難者たちを現地の「非ギリシア語話者たち」（バルバロイ）は歓迎し、寒かったので親切にも火を焚いてくれた。パウロが枝を火にくべると毒ヘビがパウロの手を咬む。現地人たちは彼らの信仰心からそれを神の報復であると思うが、パウロには何の害も生じない。そこで彼らはパウロを神と見なす。島の首長（πρῶτος: 使 28:7）プブリウスはパウロたちを 3 日間もてなしてくれる。彼の父が病に臥せっていたので、パウロが手を置いて癒す。そこで島の病人たちもパウロのもとに連れてこられ、癒される。そして島の人々はパウロたちに好意を示し、出立の際には必要なものを提供してくれたという。

### 4.2　毒ヘビ

ティベリウス時代のマルタの碑文に πρῶτος という肩書きがあり、これは他所では知られていないようなので、メリテをマルタと同定する有力な根拠になる[21]。しかしながら、毒ヘビの出来事は深刻な異論を呼び起こす。現在マルタ島で確認される 4 種類のヘビのうち毒をもつのは、ナミヘビ科のヨーロピアンキャットスネーク(*Telescopus fallax*)だけであるが、その毒は一般に人間には無害である。他方、メレダには 20 世紀初頭まで数多くの種類のヘビがおり、その除去のためにインドからマングースが輸入されたと報告されている。パウロの時代のマルタに毒ヘビがいたかどうかは不明である。ヘビの化石は見つかっておらず、爬虫類学の結論は曖昧である。環境変化によって絶滅したという説もある。最近では、ヘラクレスの祭儀のためにヘビが持ち込まれたという説が打ち出されているが、説得力に欠ける。

行伝の物語を文字どおりに取るならば、現地住民は毒ヘビについてよく知っていたことになるので、たまたまアフリカからの船に紛れていたということはない。そこで残る可能性は、この物語は使徒パウロの悪に対する勝利、あるいは新しい信仰の古いそれに対する勝利についての寓

---

[20] ブハジャー2014: 67-68 頁。

[21] *IG* XIV, 601。ラテン語訳 *primus* もマルタの碑文にある（*CIL* X, 7495）。

喩として読むことである。聖書も異教世界もヘビに対して嫌悪や恐怖を抱いていたことはよく知られている。ヘビを報復の代行者とする信仰は、あらゆるヘビは有毒だと信じていたウェルギリウスとプリニウスにも見出すことができる[22]。

## 5　マルタとメレダにおけるパウロ伝承[23]

メレダにもマルタにも使徒の時代に遡るパウロ伝承はない。マルタ伝承が確実に文書化されたのは 13 世紀のことであるが、メレダではパウロの上陸地点とされる場所が旅行者に示された 1788 年まで確かな証拠はない。年代不詳の二つの口頭伝承が、二つの建物の廃墟――ポルト・コモ(Porto Como)とコリタ(Korita)の近く――がパウロの教会と思われていたことを指摘している。書かれた記録のある教会は、1935 年に島の中心に建てられたものである――1968 年に教会内に聖パウロ像が建立された。ポルト・コモは、パウロが難破したと想定されている 3 か所のうちの一つである。他の 2 か所は、ポルト・カメラ(Porto Camera)とサプルナラ・コーヴ(Saplunara Cove)であり、それとは別にコスマチ(Kosmač)という小さな島の近くに聖パウロの岩と呼ばれる約 1 メートルの小さな岩がある。行伝の τόπος διθάλασσος「二つの海の地点」（使 27:41）に合うと思われるのはサプルナラ・コーヴの東で、そこは二つの海流がぶつかるので操舵が難しいところである。いずれにしてもメレダに確立された伝承はない。

これに対しマルタには 1536 年の強力な伝承がある。聖ヨハネ騎士団のフランス人司教ジャン・クェンティン(Jean Quentin)は次のように証言している。

> ……現地住民は……聖ペトロがローマにいたと信じるのと同じ確信をもって聖パウロがマルタにいたと信じている……[24]

---

[22] ウェルギリウス『アエネーイス』II, 44-56、プリニウス『博物誌』VVV, 35-36。

[23] ブハジャー2014: 69 頁。

[24] Jean Quentin d'Autun, *Insulae Melite Descriptio*, Lyon 1536. Cf. H. C. R. Vella, *The Earliest Description of Malta (Lyons 1536) by Jean Quentin d'Autun: Translation and Notes*, Malta: DeBono Enterprises 1980, pp. 42-44.

## 6　マルタにおける難破地[25]

マルタでパウロの難破地点として最もよく知られているのは、島の北にある聖パウロ湾(セント・ポールズ・ベイ)である。シチリア教会史家トマソ・ファツェーロ(Tommaso Fazello: 1498-1570年)によって初めて記録された伝承は年代不詳であるが、この湾がその名で呼ばれるようになったのは、そこに聖パウロ教会が建てられた15世紀のことでしかなかっただろう[26]。この教会とパウロの難破との関係は上述のように1536年には確立されており、1575年にはその教会は「パウロが難破後に初めて到着した海岸の近く」(*prope littus quo divus Paulus post eius naufragium primo pervenit*)に建っていたという記録が残っている[27]。

聖ヨハネ騎士団長アロフ・デ・ウィグナコート(Alof de Wignacourt)によって 1610 年に再建されるまでのこの教会については、確かな情報がほとんどない。マルタ人最初のイエズス会士ジローラモ・マンドゥカ(Gerolamo Manduca: 1573-1643)は、証拠なしにこの教会は古代からあって数百年前にマルタの有力者――教会に盾の紋章が飾られているマツァラ家(Mazzara)やカサノヴァ家(Casanowa)――によって修復されたと主張している[28]。彼よりも多くの情報を持っていたと思われるジョヴァンニ・フランチェスコ・アベラ(Giovanni Francesco Abela [1582–1655])――17 世紀半ばにマルタについての書物を書いたマルタ人貴族――は、この教会はボルディノ家(Bordino)とイングアネツ家(Inguanez)によって建てられたと主張している。この二つの家系は 15 世紀に影響力を持

---

[25] ブハジャー2014: 69-71 頁。

[26] 知られている限りこの呼称の最古の言及は1485年の文書である。Dominican Priory Archives, Rabat [Malta], ms. *Giuliano antica*, i, ff. 58 rv-59. G. Wettinger, *The Jews of Malta in the Late Middle Ages*, Malta: Periodicals Service Co, 1985, p. 79に引用されている。同書 (p. 256, doc. 82) は少し後の1496年の証書 (Notatial Archives, Valletta, R. 494/1, f. 35v) にも言及しており、そこには*contrada sancti Pauli di la marina*と記されている。

[27] ヴァレッタ考古学博物館、*Visitatio Dusina* - Report of the Apostolic Visitation of the Island of Malta in 1575 [18世紀の写し], f. 229.

[28] G. Mandunca, *Relazione o sian tradizione avute e trasmesse dalli antichi circa le cose dell'Isola di Malte di quanto s'è potuto cavare da scritture antiche degne di. fede* [National Library, Malta, ms. 25], 180.

っていたことが知られているので、この教会の建設年代を推測するに十分な根拠となる。現代では強い反論があるにもかかわらず[29]、聖パウロ湾は、岸に地中海性風（*gregale*:北東風）が吹く時期には、タル・アーゼリン礁（Tal-Ġażżelin）によって二つの海流が形成されるため、行伝の τόπος διθάλασσος「二つの海の地点」（使 27:41）に合致するという擁護者はいまだ存在する[30]。この説はタル・アーゼリンを διθάλασσος のセム語転訛として説明するが、あまり説得的ではない。バリッジは、διθάλασσος が二つの海流の出会う場所を意味する可能性を認めるが、水深測量と古地図の調査にもとづいて、島の北端にあるメリーハ湾(Mellieħa Bay)を難破場所と推定している。メリーハ湾の陸側には比較的大きなアーディラ湖(L-Ġhadira)があり、「二つの水塊ないし水域」が合わさった結果が真の τόπος διθάλασσος であるという（図４、５参照）[31]。

図 4: 聖パウロ湾とメリーハ湾[32]

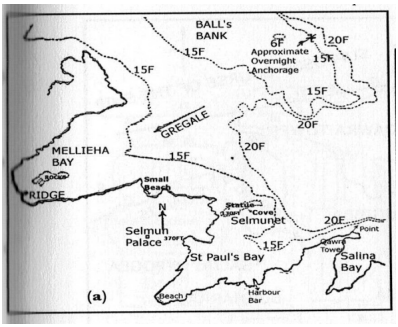
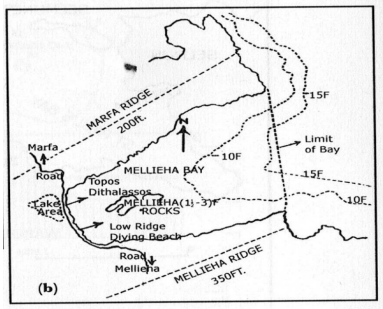



図 5: バリッジによる難破地点




19 世紀になると、難破地点はサラモネ小島(*Isoletta di Salamone*)あるいはセルムネット小島(Islet of Selmunet)に移され、その後そこは聖パウロ島(St. Paul's Island)としてキリスト教化された（図６参照）。

---

[29] W. Burridge, *Seeking the Site of St Paul's Shipwreck*, Malta: The Progress Press, 1952; R.P. Saydon, 'The Site of St Paul's Shipwreck', *Melita Theologica*, xiv (1962) 1-2, 58-61; G.H. Musgrave, *Friendly Refuge - A Study of St Paul's Shipwreck and His Stay in Malta,* Sussex: Heathfield Publications, 1979).

[30] L. Cutajar, '*Fejn Nizel Malta San Pawl', Lehen is-Sewwa* [Malta], 7.ii.53; Aless Bonnici (ed.), *San Pawl f'Malta – Religion u Hajja: Storja* 1, Malta 1967.

[31] Burridge 1952: 14.

[32] 図４、５は、ブハジャー2014: 335, Pl. 55a-b による。

図 6：聖パウロ島（セルムネット小島、最短約 80m。上村 2021 年 11 月撮影）

これは 1,180m の楔形の岩島であり、聖パウロ湾の西の外端を形成しており、「地中海性突風がぶつかってその大波を二方向へと分ける位置にある」[33]。しかし、行伝の記述からすると、この島そのものに座礁したことはあり得ない。というのも、そうだとすれば生存者は島からの救助を必要としたはずだからである(行伝では海から救助されている)。ジェイムズ・スミス船長は、海深図を作成し、パウロ一行はコウラ・ポイント(Qawra Point)で錨を下ろし、セルムネットで難破し、生存者は地滑りで小さな入り江ができていたミストラ(Mistra)岸に泳いだと論じた。彼にとってはτόπος διθάλασσος がどこであったかよりも、ふさわしい海岸はどこであったかの方が重要だった[34]。その結論は、ミストラではなくサリニ湾(Salini Bay)であると主張するマスグレイヴによって異議を唱えられている(図 7 参照)[35]。

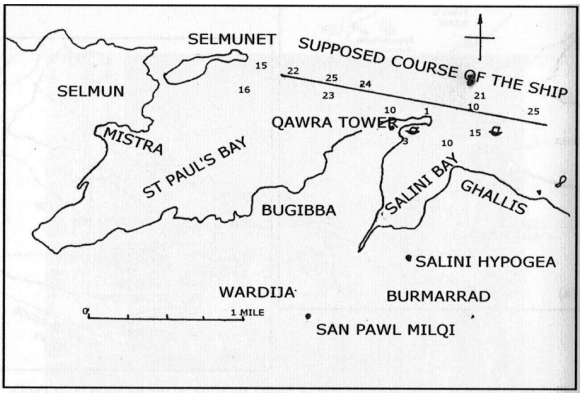
---

[33] Burridge 1952: 14.

[34] J. Smith, *The Voyage and Shipwreck of St. Paul: With Dissertations on the Sources of the Writings of St. Luke, and the Ships and Navigation of the Antients,* London: Longman, Brown, Green, and Longmans, 1848.

[35] Musgrave 1979: 19-32. 佐藤研『旅のパウロ――その経験と運命』岩波書店、2012年、217頁もサリナ湾を支持している。

図7：マスグレイヴの提案する難破地点とその周辺地図




難破を聖パウロ湾内ないしその周辺に位置づける理論は、中世後期の伝承に由来する。しかし、スミスの風向きについての議論はむしろ北東の海岸を暗示している。結局、τόπος διθάλασσος の議論はあまり役に立たない。それはいくつかの意味の可能性を持っているし、ほとんどの場所は船を座礁させることができる[36]。実際のところ、行伝の記述はその場所を特定できるほどの手掛かりを与えてはくれないのである。

## 7　キリスト教共同体成立についての伝承[37]

イムディーナのカテドラルの正面扉の上にある*DIVO PAVLO MELITENSIVM PROTOPARENTE*(「メリテ人たちの始祖、神なるパウロに」)と、ゴゾのカテドラル内にあるバプテスマ盤の上の壁にある*ACCEPTA VIX A PAVLO PROTOPARENTE CHRISTI FIDE*「[バプテスマを]ただちに受けよ、キリストの信者たる始祖パウロから」という二つの碑文は、自分たちのキリスト教信仰を聖パウロに負っているというマルタ人の確かな信仰を誇らしげに宣言している。これはマルタに最も深く根づいている伝承の一つであり、民族感情の主要な関心事の一つとなっている。しかし、行伝はキリスト教共同体の成立については語っておらず、さらには4世紀後半より前にキリスト教徒の存在を示す証拠はな

[36] διθάλασσος の解釈については、田川『使徒行伝』659-660 頁、荒井『下巻』362-363 頁参照。

[37] ブハジャー2014: 71-75.

い。

中世後期より前のマルタの歴史は、資料の圧倒的な貧困さゆえに、極めて不利な条件下に置かれている。僅かに利用可能な素材もその多くは信頼できず、「マルタはアフリカ的でムスリムであるよりも、本質的にヨーロッパ的でキリスト教徒であったという信念」[38]を維持するために、ときに伝説が恣意的に捏造されてきた。その多くが中世後期に遡るこうした神話を永続させてきたのは、『マルタの書』を1647年に出版したジョヴァンニ・フランチェスコ・アベラであった[39]。同書は最近までほぼ誤りのない参考文献として非常に高い信望を得てきた作品である。アベラ(1582-1655)は、マルタの貴族の家系に属した妥協なき愛国者であった。彼はまた司祭であり、聖ヨハネ騎士団の副団長でもあった。聖ヨハネ騎士団は、使徒の時代からキリスト教界の砦であった島の修道院として自らの名声を高める「諸伝承」を教会とともに推奨してきた。アベラは様々な分野に関心を抱く熟達した学者であり、歪曲された証拠をもって彼を糾弾することはおそらくフェアでない。にもかかわらず、「他のどの土地よりも最も幸運な人生」(*fortunatissima vie più d'ogni altra terra*)[40]であるというマルタの主張を守るという彼の衝動ゆえに、アベラは口伝で伝えられてきたという空想的な伝説に対してしばしば非科学的に寛容であった。

1566年にジャン・クェンティンがこうした伝説について軽く議論したが、彼に続いて懐疑を共有する者はいなかった。1570年代にイエズス会はマルタに興味を示し、1592年にマルタに同会を設立した。マルタ人最初のイエズス会士になったジローラモ・マンドゥカは、マルタにパウロの神話を普及させる立役者になった。彼はその生涯のほとんどをシチリアとローマで過ごし、たまにマルタを訪ねていた。彼はマルタについての情報を仲間に広め、彼に続くマルタについての著者のすべては彼に負っていたが、とりわけアベラがその一人であった。

マンドゥカは二本の論文を残しているが、その資料は「長老たちの諸伝承」であり、彼はそうした寓話を聖書テキストや古代から中世の著作

---

[38] A. T. Luttrell (ed.), *Medieval Malta - Studies on Malta before the Knights*, London: The British School at Rome, 1975, p. 2.

[39] G. F. Abela, *Della Descrittione di Malta*, Malta: Per Paolo Bonacota, 1647.

[40] 同上、p. 221.

物によって正当化している。彼の著作の中に、それ以降マルタに広まっているパウロに関する様々な奇跡物語やエピソードが収められている。ブハジャーはそれらの一つ一つを取り上げて、後世に作られた空想であることを示しているが、本稿ではこれ以上そうしたエピソードを扱う必要はないだろう。

## 8　考察

ブハジャーはマルタ人ではあるものの、パウロが難破してたどり着いたメリテがマルタかメレダかという問いを開かれたものとしている。地理的にはマルタの可能性の方が高いが、それはパウロ一行がメリテの次にシチリアのシュラクサに渡ったということだけを根拠とする。毒ヘビの奇跡に何かしらの史的信憑性があるとするならば、毒ヘビの存在しないマルタではあり得ない。しかし、そもそも奇跡物語は作り話であるという当たり前のことを勘案するならば、マルタの地理的優位は揺るがないだろう。

パウロがマルタで起こした奇跡物語は、毒ヘビと病人の癒しの二つを語るが、実際のところ行伝の伝えるエピソードはこれしかないと言ってもよい。ではなぜこうしたエピソードが作られたのだろうか。

この二つの奇跡物語の果たす役割は、マルタの人々がパウロ一行に対して「並々ならぬ人間愛（φιλανθρωπία）を示して受け入れ」（使 28:2）、出航するときには「必要なものを持ってきてくれた」（10 節）ことの理由を提示しようとしているように見える。行伝著者にとって、マルタの人たちはバルバロイであった。この単語のもともとの意味は（1）「吃音者」であったが、その後（2）ギリシア語以外の「奇妙な言語」を話す者、（3）ギリシア人以外の「奇妙な民族集団」、アレクサンドロス大王以降はヘレニズム文化以外の文化の担い手、すなわち（4）野蛮人、粗野な者、凶暴な者、未開人を意味し、（5）身分の高い外国人を指す場合にのみポジティヴな意味を持ったという[41]。われわれの箇所については、（2）のギリシア語以外、すなわちポエニ語を話していたとする説があるが[42]、そうとは言

[41] H. Windisch, art. “βάρβαρος”, in G. Kittel (ed.), *Theological Dictionary of the New Testament,* English translation and edition by G. W. Bromiley, vol. 1, Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, [7]1978, pp. 546-553.

[42] *Ibid.*, p. 551.

い切れない。マルタは確かにポエニ語を話していた時代があったが、前218年からローマ支配下にあったのであり、それから280年近く経っていることからすれば、ラテン語話者は少なくなかったはずである。また、ギリシア語は当時の公用語であったし、マルタは海洋貿易の中継地であったのだから、ギリシア語のできる者も少なくなかったであろう。マルタから見つかっている碑文、特に墓碑にはこれら3言語が使用されている。これら碑文には他の地域で見つかっている碑文と共通する定型的な特徴を有する物もあり、それは移住者の存在を示している。移住者は、墓碑に自分の母語を用いたと考えられる[43]。つまり、当時のマルタはトリリンガルな状態にあったのであり、言語だけを理由に行伝著者がマルタ人をバルバロイと呼んだとは考えにくい[44]。

パウロが「ギリシア人にもバルバロイにも、知恵ある者にも無分別な者にも」（ロマ1:14）と言うとき、彼はギリシア人を知恵ある者、バルバロイを無分別な者とすることを前提にしている[45]。行伝著者も同じであり、ここではバルバロイにもかかわらず、「人間愛」を示していることを対比的に語っているのである。ここには島の住民に対する侮蔑が前提されていると言わざるを得ないので、「野蛮人」と訳すのが適切である[46]。

この箇所はいわゆる「われら章句」に属するので、行伝著者による単語の選択なのか、資料の書き手のそれなのかが問題になりうる。私見で

---

43 マルタの碑文については、Maria Domenica Lo Faro, "Observations on the linguistic epigraphic choice in late antique inscriptions from Malta," *Malta Archaeological Review* 9 (2008) 14-21参照。

44 後述するように、行伝著者はパウロと同行してマルタに行ったわけではないので、言語状況を考えたというよりは、辺境の島というイメージだけで語っているのだろう。さらに、おそらくは彼の利用した資料にすでにバルバロイという単語が使われていたということもあろう。

45 田川建三訳著『新約聖書　訳と註4　パウロ書簡　その二／擬似パウロ書簡』作品社、2009年、108頁参照。

46 田川訳著『使徒行伝』がこの訳を採用し、ルカの差別意識を指摘している（663頁）。口語訳は「土地の人々」、新共同訳と協会訳は「島の住民」、フランシスコ会訳は「島の住民たち」、新改訂訳は「島の人々」、荒井（岩波訳）は「外人たち」と訳し、『下巻』（367-369頁）でその理由を、そのように言われた住民の感じる「被差別感」のニュアンスを込めたと説明している。

は行伝著者はパウロの同行者ではない(つまり医者ルカではない)ので[47]、資料の書き手がバルバロイの語を用い、それを行伝著者も採用したと考える。つまり、二人ともパウロと同じ偏見を前提にしている。困難な航海の後に親切にもてなしてくれた人々を、なお「野蛮人」と見なす高慢なギリシア人キリスト者は、「野蛮人」が理由なく人間愛を示すことが理解できないのである。それゆえに、行伝著者は二つの奇跡物語を作り上げ、マルタの人々がパウロ一行を受け入れただけではなく、野蛮人とは思えないほどの人間愛を示した理由としたのである。行伝著者はパウロとともにマルタに行った同行者ではないので、マルタに毒ヘビがいないことを知らずに奇跡物語を捏造してしまった[48]。毒ヘビを持ち出したのは、ブハジャーの言うようにヘビが報復の代行者としてギリシア人やローマ人に信じられていたからであろう[49]。パウロが毒ヘビから害を受けなかったという記述には、ルカ特殊資料との関連が見られる(ルカ 10:19)。またパウロを「神」と思ったという記述も、リュストラでのパウロの奇跡行為に対する群衆の反応(使 14:11-12)を彷彿させる[50]。プブリウスの父親の熱病を癒し、その後に島の病人が来てその人たちを癒すという二つ目の奇跡物語は、ペトロの姑を癒す奇跡物語を思い起こさせる(ルカ 4:38-40)[51]。

行伝著者の利用したマルタでの出来事についての資料にあったのは、おそらく雨と寒さを凌ぐために火を焚いてくれたこと（1-2 節）とプブリウスに親切にもてなされたこと（7 節)、出航の時に必要なものを提供してくれたこと(10 節後半)だけであっただろう。二つの奇跡物語は、パウロ（およびキリスト教）を持ち上げつつ――ブハジャーの言う寓喩と

---

[47] ルカ文書の緒論的問題については、拙稿「ルカはなぜパウロの最期を記さなかったか――ルカの歴史認識――」『新約学研究』41 号（2013 年）7-26 頁参照。「われら章句」が行伝著者の直接の目撃証言ではないことについて、荒井献『使徒行伝　中巻』新教出版社、2014 年、341-347 頁、同『下巻』327-328 頁参照。

[48] 荒井もこれを史実の報告ではなく奇跡物語における行為者の登場と見る（『下巻』371 頁)。

[49] 荒井『下巻』372 頁は、ヘビがエリニュス（復讐の女神たち）の化身とされるギリシア神話の例を挙げている。

[50] 同上、372-374 頁参照。

[51] 同上、377 頁参照。

しての機能を果たしつつ――、「野蛮人」が人間愛を示すというギリシア人には信じがたい出来事の理由を説明するために、行伝著者によって後から創作されたものということになる[52]。

## 9　結論

本稿では、行伝著者（およびその資料の担い手であったパウロの同行者）が親切なマルタの人々をバルバロイと呼んでいることをヒントに、マルタでの奇跡物語が生み出された理由を考察した。そして、そこには異文化に属する人々に対するギリシア人キリスト者の差別意識があることを確認した。4 世紀後半までマルタにキリスト者の存在が確認されないのは、故なきことではないのだろう。

その後のキリスト教は、宣教の名のもとに世界を征服していくが、そこに行伝著者と同様の現地人に対する差別意識があったこと、それゆえに軋轢と暴力が繰り返されてきたことは歴史が証明している。自文化だけを洗練されたものとし、自分たちだけが真実を知っていると思い上がってなされる「宣教」ほど野蛮なものはない。バルバロイと呼ばれた人たちの示した「人間愛」こそが、多文化の共生を可能にするのである。そのことをパウロ一行をもてなしたマルタの人々が証ししている。

パウロの滞在を民族アイデンティティーの根幹に据えるマルタにあって、それにまつわるナショナル・ヒストリーを真摯な学問的姿勢で解体していくブハジャーの態度もまた多文化共生を可能にする国造りのために必要なことであろう。パウロの時代のマルタ人と同様に、今日のマルタ人も異国人に対して開かれており、またとても人間愛に満ちている。経済的な事情があるせよ、積極的に移民を受け入れている。アジアやアフリカからの移民も少なくない。冒頭で触れたように、マルタの人たち

---

[52] 荒井（同上、374 頁）は毒ヘビの奇跡物語の狙いを、パウロがカエサルの前に立つという神の定めの中にあって誰にも危害を加えられず（使 27:24）、乗船者全員が救われ（27:42-43）、マルタにあっても神の保護下にあって「神」と呼ばれるほどの「神の器」であることを読者に訴えることにあるとする。現在の行伝全体の文脈からすればこの解釈に妥当性はあるが、あえてここに奇跡物語を挿入しようとした動機、さらには続く癒しの奇跡物語を創作しようとした動機は、著者の入手した伝承――マルタ人が人間愛を示してくれた――に補足説明を加えたかったからであろう。

は西欧では珍しく今なお真摯なカトリック信者が多数を占めている。それでも彼らは異文化・他宗教の人たちを受け入れようとしている。そこにはキリスト教徒としての寛容さというより、マルタ人の伝統があるように思われる。ブハジャーのような歴史学者がナショナル・ヒストリーを解体したとしても、マルタ人は民族アイデンティティーを失わないだろうと思う。異文化の人を異文化のまま人として受け入れる民族という民族アイデンティティーは、「民族」という共同幻想が保持されている限り、そしてその共同幻想が争いの種であり続ける以上、多文化共生のために有効なものとなるであろう。戦争の時代に突入した今、われわれもまた多文化共生のために、世界に平和を生み出すために、自分たちの共同幻想のあり方を再考しなければならない。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 20270547 の助成を受けたものである。